

晩餐会

初夏の風心地よき室に、語りみますあるじ、まろ
うどの君六人七人、わがまゐりたるに、物語しばし
とだえぬ。墨絵の軸かけたる床の前に、主賓なる深
田ぬし、むかひて主人の博士。それより並びて、何
れも文学界にはた美術界に名だたる方々、われは夫
人の君の傍らに小さくなりてと思ふに、御声は起り
ぬ。わがまゐらざりし程の物語のつづきなるべし。

『我は物の匂ひによりて、其さしあたりたる折を思
ひ起す事あり。例へばロンドンにありしほど、北よ
り南に移り住みたる折などに、程経てありし北の町
を訪ふに、其住みつる折は何とも心づかざりしある
匂ひを感じ、それによりてありし程のさまざまを思
ひ起すなり』 『さらばいかなる匂ひよりてか、今宵
の団居は思ひ起し給ふべき』と夫人。

『そは今はみづからも知らず、今は何の匂ひありと
も覚えねば』と。

この物語によりて、こは今の文壇に名をはせたるい
みじき猫の御かひぬしならずやと、何となく押はか

る。

『此程は何をか書き居たまふ』とさらに夫人。

『否何も』と。

『さらばよみ給ひしや』

『旅より帰りて中央公論にいでたる御許のはよみた
り。』

あるじの君、中央公論に出たる桑木博士の啓蒙思想
といふをよみて思ふふしを書き送りたるに、返しあ
りきとて、其絵葉書をとりに出でらる。これにつきて
いろいろむつかしき物語あり。

しばしして話題は西の京にうつる。近き頃京に遊
ばれしは、同じくさきに物の匂ひ説きし君。まづ嵐
山の景色よりはじめて、山水の美は誰も誰もみとめ
らるる所なれど、風俗に入りてさまざま論あり。京
の女は皆美しきにやととふ君。『否十年前とひし時
はまこと美しと思ひき。こたびは聊か期して行きつ
るに、さまざまにもあらざりき』

『そは京の女の年々に美しからずなりゆくにか。』

『否々君が御目の』といひさして笑ふ君もあり。

『京の朝は茶がゆ啜る音にあげゆくととは人のそしり

なれど、つつまやかなる習ひはいづこにも現はれて、家居までも薄暗う建つる習ひといふ。強き日の光は物の色を奪へば、南向きの家居しつらふは京の人の得なさぬなり。されど出入口の低きなど、凡て茶がかりたる作りなるはみやびかなりといはばいふべし。』

『ここに京の人あらば悪しかりなむ』と主人笑ひ給ふ。

『否々京の人はなかるべし。されども三年の留学の後かしこの大学に行かるべき今宵の主賓のため、余りそしらぬこそよけれ。君よ御心安うおぼせ、帰り給ふ頃には京も長足の進歩をなして君を迎へむ』と人達わらふ。室の片隅に活けられたるマルグリット、石竹の花も、我等とひとしく打笑むにや、頻りにゆらげり。

人多く集まりたる処には、必二人三人づつかたまりあひて、己がむきむきの話に耽りたる。水にときし粉の、ふつふつとまま子といふ物の出来たる様なりと、誰やらのいひしと覚ゆれど、今宵の団居は人々の心一つになりて、親しく和らぎたればにや、

一つの事のいひ出らるる直ちに室にひろがりゆく。かの湧きいづる泉の水の、たゆる期なきあやをゑがきゑがきて広がりゆくに似たり。

床の間の何とかや名高き人の手になりつときく像も、いつしか団居の中に歩み出て、主人の君に見いでられし故郷パリの物語する様なり。いかに故郷恋しきやと語らむとするに、ふと話はケーブル先生の御上にうつる。先生は故郷を遠く離れまして既に久しきを、いかに思ひ居ますらむといふに、故郷の御話はたまさかにもいづる事なしとききて、あるじの君、『先生は書をよみピアノをひき、御心のままの国にすみ給へば、所せき地上の境域など何とも思し給はじ。尊き故郷は御心の中にあらむ』といひ給ふ。深田ぬし、先生のもとにすみ給へば、日頃の御事ども、語りいで給ふ。夕されば必ピアノに向ひ給ふとききて、さる夏、さる人の夕暮毎に通ひて門辺にたらずみ、蚊に苦しめられ、犬に吠えられしといふ事あり。この団居の中にも、深田ぬしの許に何をか届けむと、夜かしこを音づれしに、戸をあくるや、けたたましう吠えつかれて其儘にげ帰り、又の朝使し

て用を果しし君ありときく。

兎角する程に、来給ふべきは皆きましぬ。食堂の用意なれりとて、夫人に導かれぬ。清らにしつらひたる中二階の一間、前の木立に心地よき調べかなづる風は、灯火けたぬ程に吹き入りて、美しう飾られたる食堂には晴やかなる面わ並べり。こなたのつらは深田ぬしを真中に、右へ猫の御飼主、主人の君、左へ新婚の君より、女づれ。あなたは主人の君の前に、黒き羽織の君、乙骨の君、もてしづめたまへる絵師の君より、新海の君、頻りに扇づかひし給ふ富尾木の君。

ベルリンに物すべき君は、曾て居給へりしあるじの君、さてはロンドンにいましし君に、彼の国のさまさまを聞き給ふ。食事の作法よりはじめて、なれねば誰もなすべきをかしき過ちなど、面白うつぎつぎ語り出らる。

まづナイフとフォークは、其かしらに向ひ合せて斜に置き、必重ならぬ様になすべく、手を休むる時はかく、終りたる時はかくなど語らるるに、さてもむつかしき事、規則にふれざらむとすれば物の味も

得わかじと怨ずるもあり。許し給へ、今宵は誰も己が儘にと定まりぬ。

『ロンドンにて人に招かれたる食卓にて、葡萄酒をかへして白き食卓かけを紅に染め出したる事ありしが、さすがに彼の国の人々の人扱ふすべに慣れたれば、誰もさるあやまちはなすものなり。われもせし事ありき。我も我もと繕ひくれたりき』との話あり、これに思ひ出でぬるは、さる名高き女子体育家のアメリカに行き給ひて程なき頃、さる晴がましき宴に、肉を切ると頻りになれぬナイフをもて扱ひ給ひしに、やがてやうやうに切れたる肉の一ひらは、遠く空中旅行をなして、向側なる主賓の女君の盛装したる御胸のあたりをひたと折ちぬ。思はぬ過ちに、ナイフ持ちたる儘ひた呆れにあきれたりしが、我に帰りて、恥かしさに堪へずうち伏したるに、団居の人の慣れねばこそその事、われらさへさる事はしばしばある物をと、頻りに慰めくれたりきと語られしを思ひ出でぬ。

あるじの君、『かの地にてはじめの程誰も困うずるは料理の名なり。メニューさしつけらるるとも、

いかなるが如何なる物の名なりと知らねば、よき程に指先もて示すに、思はぬ物のいでくる事あり。されば食事する毎にかならずメニューを持ち帰りて、其時の物に印など付け、一つ一つと覚えゆくなり』

彼の猫の君、『メニューを指先もて突くに就きて、面白い話あり。船の食堂にて或人今少しにてフォルモサ食うべむとしたり』とききて、皆人あやしがるに、『其人メニューの初めの行を指先もてつきたるに、そは船の名のフォルモサといふが記されたるなりき』

アスパラガスの出でし時、こは指もて持つべきにや、はたナイフ、フォークもて食すべきにやと、向側よりとひおこりぬ。こなた側のさる君、

『幾年の前、ある席にて始めてこのアスパラガスは見たりき。其折こは何ならむとただ打ち守り居たるに、隣なる某君は、少しもためらはず指につまみて食うべき、われは何事にも頓着なき某君なれば、指にてつまみたりしならむと思へりしに、其後誰も誰も指もてなす様なりき』と語りいづ。

『指の事、指の事、トルコ流こそ物は甘けれ』と再

び向ひ側より。

主人の君、『トルコといふにて思ひ出でし事こそあれ、同じくかの国にての事なり。メニューに、ビフテキ、アラ、トウルカとあるを見ていかなるにかと誂らへしに、肉の刺身やうのものなりし。自ら誂らへし物をたべぬもと思ひて、半まで忍びてたうべしかど、遂にフォークを捨てき』

『さる事は誰もなす事なるべし。我も精進料理に入りて肉を誂へつる事あり』

『かの地にも精進料理といふものありや』

『野菜料理といふのなり』

小鳥のいでたる折もいと面白かりき。これこそ手腕を要するものならめ。まづ何処よりかとナイフとフォークを持ちたる儘しばらく見守るあり。鳥なればことに危し。あらぬ方にとび行くなといひて追ひ廻すもあり。

『これもロンドンにての事。彼処にてあるじ役つとむる者は、客に料理を分ちやる習なるが、わが友と食卓につきつる折、小鳥のいでし事あり。主人役なりしわれは、掟のままに小鳥を半より切りて友に与

へつ、友は忽ちにしてたうべ終へつるに、わが皿には猶多くを余せり。いかなればとよくよく見れば、わが友に与へつるかたは骨のみ多きなりき』

『それよりいかにかし給ひし』

『いかにともせず、唯われは残れるわが事務を終まで滞りなくつづけき』

チーズは、とる人とらぬ人あり。これこそ、馴れねば得たうべぬものといふに、わが隣なる君は、殊に好めりとの給ふ。そを好むといふは何とやらんいふものをといひし君ありしかど、聞漏しつるこそほいなければ。塔めきて作られしアイスクリーム、かたはしよりそがれゆく。

ひげあらひの水いでて、頬あかき林檎は人々の手にとられぬ。イギリスの人は果物をさへフォークにさして皮むくときく。

ひげあらひの水は今用うべきなりとききて、これ飲まざりしこそよかりしかと戯れつつ人々指ひげなど清む。『かの国にてさへ、此水のみたる話はある。

将校に招かれたる下士官の、さる晴やかなる宴に馴れねば、さりとも知らで髯洗ひの水を飲みつるに、

将校たち其場をつくろふと、皆ひとしく其水をささげて、下士官の君の万歳を祈るといひき』と。

いち早く胸かけをたたみて卓の上に置きし君の、そは卓を立つ折に為すべきなりとききて、我はただ隣の君のなししままにまねびつるなり。こは聊か馬鹿息子の感ありきとて、再び胸にかけらる。

此方はカフェーの泡にあすの天気占ひなど笑ひかはず中に、彼方より又例の猫蓄ふ君、

『夫人の君よ君にささげむと思ふものあれど』

『何ならむ何にても』

『彼のさらさといふものなり。信玄袋かみ入れなど作るによしといふインド更紗なり。一寸四方ほどのさへ尊き価という。されど御許にて御用途なくはかひもなし』

『いと珍らかなるもの、賜はりなん、いかばかりの大きさにか』

『一反はあり。されどインド更紗ならず、擬ひの京染なり』

『さなりや、京染にてもよし。御話に一寸四方などいひ給へば、一反などとは思ひも寄らざりき。一と

しほ忝なし』

西方町の夜はいとさびしといふ事より、『御あたりにはぬす人の入らずや』と夫人。

『千駄木にありし程はしばしば……』

『さらば彼いみじき猫のかいたる山の芋のはまことにや』と人々問ふ『山の芋のみは作り事なれど』と笑ひ給ひて、『されど西片町に移りてよりは未だ一度も音信なし』『ここにはしばしば音づれあり』

と夫人のいひ給ふに、派出所は遠きにやと問ふ君。

『遠きにはあらねど、この巡査は盗人などいふさる床しからぬ事は知らぬげなり』と笑ひますに、

『何の御話にか』と人たち、夫人『幼き者の幼稚園の送り迎へせさせし小間使の往来に、かの派出所の前を通るに、或時これをとて巡査の何やらむ書きたるものを渡したりといふ』『何をかいかに書きたりけむ』と頻りに床しがる君あり。『こはよき材なり。慥かにかくべき値あり。巡査の恋、巡査の恋その小間使のさがりしはいつにか侍る。物語こそきかまほしけれ』と笑ひあふ。

かくて皆心のままに、楽しき物語は縦に横に、人

より人に行きめぐれり。

さざめきの中に食事はてて、人々座を立つ。跡に敷物の美しくう並びたるを顧みつつ、面白き事のみのたまふ例の君、あるじの君に、『君が家には敷物のよく揃ひたる事、わが家のは五つのみなれば、客の六人七人となりてはせむ様もなし、よき程に出して知らぬ顔になしあるなり』と笑ひつつ。

やがて人々下りゆき給ひぬ。しばし椽に出でて見れば、天地にみちわたりたる薄靄のこの庭にも下りて、六日ばかりの月あはくさしたり。下には花壇のあたりほの白う花のかげ見えて、うら若げなる虫の声あり。あたり何となく静けきに、我身は次第に靄の中にまぎれなむとす。かくてしばし。ふと遙かなる天上の思ひ。見おろす下界は夜の色に包まれて、遠く遠く隔たりぬとおぼし。まことかくて独り天上にあるにや。下界にも恋しきものあらずやなど思ふに、遙かなる方に我名を聞く。夢の中なる夢の声きく様にきき入りたるに、つと起りたる笑ひ声あり。われに返れば、階子のもとに我を呼び給ふは夫人。下の室には何のか興新たに湧くとおぼし。ともに行

くに、人々は絵葉書したためおはせり。『決心』とかの型にいみじき技ふるひ給ひしときく君、『かりそめの悩み』といふ御絵に御名高き絵師の君、只今まで物静かにおはせしが、筆とりますや忽ちめぐる水車、小川の流、月の光、さてとりどりの言の葉草そへて出し給ふとて、すらすらと書く君、これを一期の大事と様に肱を張りてかく君、『かうやうの折こそ苦しけれ、まこと書はかきならふべきものにこそ、君は三州の手なれば、大きく書き給へ、我はその下に小さくかかむ、それよりもかくむき合せて』『否、同じ行に』など若き学士の君たちとりどり評議せらる。『とくなし給へ、赤門の城に三年四年とたて籠り居給ひしつるものに似ず、さる事に物怖ぢせらるるこそをかしけれ』と、こなたより笑ふもあり。猶二ひら三ひらと美しき絵は成り行く。この絵葉書のゆくへはいづこ、京の桑木博士のもと、さては同じく彼地の大学の君たちへとときく。さらばこの絵葉書よ、さきのほどの京につきての論戦はかまへて洩すなど念ず。それより再び物語の花咲く。あるじの君、書におすべき印をゑらせつととり出でて示さる。う

つぼる文庫といふのなり、こはあるじの生れ出まし地の名ときくに、例の君、何々村字うつぼるといふのなるべし。我は字といふばかり好ましからぬはなし』と語らる。さいひ給ふは江戸の御生れなればなるべし。されど顔などにいできたる青き黒きあざならばこそあれ、村の字など何かあらむ、かへりてさる処にぞ人の中なる人は出づべきといひ返し給ふもあり。それよりおのがじし故郷もの語りなど笑ひ声たえず。げにもあたら此まとみありけむ事の惜しさよ。かくてあれば夜更くるも知らず。いつ迄も興つきじと思ふ。興つきずともさてしもあらねばとまづ家居の遠き人よりこの惜しき団居をたち給ふ。

やがて我もいとまます。まこと西片町の夜は物静かなりけりとかへり見れば、椎の大木の、夕月いつかきえし星月夜の空に枝をはりたるが、さと渡る風に声あり。風も心地よし。夜のさまも心地よし。わが心はいひ知らず和らぎたり。世にすめば身にまつはるわづらはしさの、払ふともはらふとも払ひつくせじを、おのれを忘れ世を忘れし今宵の団居の清く楽しかりしかな。思へば我も猶幸ある心地す。こ

の心地よとはにはにきゆるな。消えずあれ。(五月十八日の夜)

【入力者注】底本と行を合わせるために、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社

平成二十一年(2009)年十月十五日発行

初出：「心の花」第十一卷第七号

明治四十(1907)年七月一日発行

筆名：橘糸重子

入力：小林 徹

公開：令和四(2022)年十月十一日

橘糸重 [【散文作品集】](#) に戻る。